

(土俵 時を超えて)「ヒョーショージョー」脈々と 故デビッド・ジョーンズさん 大相撲

2017年1月7日05時00分



1968年秋場所で大鵬に賞状を渡すデビッド・ジョーンズさん＝いずれも東京都台東区の蔵前国技館



■優勝トロフィー贈呈30年

大相撲の本場所の締め執り行われる表彰式でかつて、優勝力士以上に注目を集めた人がいた。

ハプニングが起きたのは1973年の初場所。幕内優勝した当時大関の琴桜にパンアメリカン航空賞を贈呈するために土俵に上がった小柄な米国人が、トロフィーの重さに耐えかね、ひっくり返ってしまった。

笑いに包まれる会場で琴桜に抱え起こされた袴（はかま）姿の人物は、パンアメリカン航空の極東地区広報担当支配人だったデビッド・ジョーンズさん。「ヒョーショージョー」と、片言の日本語でユーモラスに、時折間違えながら表彰状を読み上げる姿が人気を呼んだ。

53年に始まったこの賞で、ジョーンズさんがトロフィーの贈呈を始めたのは61年夏場所。賞を廃止しようとした同社の日本総支配人に反対し、ニューヨークに飛んで副社長を説得した際、「総支配人がやらないなら私がやる」と言い放ったことがきっかけだったという。91年夏場所まで、30年にわたって大役を務めた。

■博多弁も駆使

「方言保存運動に興味がある」というジョーンズさんは、66年九州場所で観客を沸かせた。「アンタクサ、ヨーガンバッテ、ヨカ成績バ……」と、突然、博多弁で表彰状を読み上げ始めたのだ。事前に口上をローマ字で書き下し、抑揚の矢印を付けて猛特訓したらしい。

ジョーンズさんは「それ以前から各地で一言ずつ着手した方言作戦は、ここで一応完成した」と後に振り返っている。それ以降、大阪での春場所、名古屋場所、九州場所では表彰状を方言で読み上げた。

横綱大鵬の32度の優勝のうち、31度でトロフィーを渡したことを「誇り」と語っていたジョーンズさんは、2005年に米ネブラスカ州で89歳で亡くなった。高さ115センチ、重さ42キロのトロフィーは国技館の相撲博物館に寄贈され、保管されている。

■友好の証し、8カ国から杯や楯

幕内優勝を果たした力士に贈られる約20種の賞品のうち8種は外国からの友好杯や楯（たて）だ。ジョーンズさんのように方言を織り交ぜることはないが、今でも大使館の代表らが表彰式で日本語で「ヒョーショージョー」と読み上げる。

チェコ大使館のミラン・スラネッツ次席は昨年春場所、大使の代理で千秋楽の取組を観戦し、表彰式に出席した。「本当にエキゾチックな競技。あんなに大きな体なのにスピードもあって、すごいスポーツマンたちだと驚嘆した」。表彰状を読み上げ、優勝した白鵬にチェコ名産のボヘミアングラスでできた友好杯を手渡した。

近年はチェコ、アラブ首長国連邦、メキシコ、中国、ハンガリー、モンゴル、フランス、ブルガリアの8カ国が継続的に友好杯・楯を出している。1970年の大阪万博を機に当時のチェコスロバキア政府が贈り始めたチェコ国友好杯は、最も歴史が長い。

チェコ大使館によると、共産主義体制の崩壊やスロバキアとの分裂、その後の不況の間でも、「テレビなどでの露出も多く、宣伝になっている」との理由で続けてきた。スラネッツ次席は「チェコと日本の友好の証しとして、大きな意義がある。ずっと続けていきたい」と話している。

(菅沼遼)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.